

マタイ 7 章 24－29 節 「人生の土台」

マタイ 5 章から始まる山上の説教の最後の部分です。家とその土台という喩えです。家を建てる時には、その土台をしっかりと据えることが大切です。イエスさまは「岩の上に自分の家を建てた賢い人」(24節)と「砂の上に家を建てた愚かな人」(26節)と対比して語ります。岩と砂は、しっかりとした土台ともろい土台を表しています。ここで土台を何にするかということ、また家を建てるのに苦勞をして、時間をかけてするのか、それとも安易な、楽な道を選ぶのかということが言えるでしょう。

この譬えは、私たちの人生、生き方についてのことも指しています。どう生きていくのか、その基盤、土台をどこに置くのか。「雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった」とは人生の雨風、様々な苦しみが襲ってきても、土台がしっかりしていれば倒されてしまうことはないのです。しかし、26節の「砂の上に家を建てた愚かな人」である砂という脆い土台の上に人生を築いている人は、何も無いときは良いかもしれないが、一旦雨風が起こってくると、それに耐えることができず、倒れてしまう。そうならないために、私たちは自分の人生、生き方をしっかりと岩の上に築いていかなければなりません。しかし、苦勞をして、時間をかけることによって、必ずしっかりと土台の上に人生を築くことが出来るのでしょうか。では、その土台となる岩とは何のことでしょうか。

24 節と 26 節の「わたしのこれらの言葉を聞いて行う」ことこそ、あなたがたが土台とするべき岩なのだということです。「これらの言葉」とは、山上の説教全体です。その中でも特に「あなたがたの天の父」という言葉が何度も繰り返されているため、とても大事だということがわかります。父である神さまは子である私たちを養い、守り、導いて下さる。自分だけで生きようとしている私たちに対して、神さまの天の父としての愛が既にあなたを支えている、あなたの土台となっていると、宣言をしているのです。そして、そこにこそ人生の本当の土台があるのだということを教えて下さっているのです。

よく本文を見てみますと、「岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている」「砂の上に家を建てた愚かな人に似ている」の「似ている」という言葉は、未来形が用いられています。その未来形、将来を表す言葉は、この世の終りの、神様による最後の審判を意識しています。山上の説教は最後に、世の終りの裁きを見つめているのです。そうであるならば、「雨が降り、川があふれ、風が吹いて襲ってきても倒れない」、それは、世の終りの裁きにも耐える、そこにおいても滅ぼされることなく、命に至ることができる、ということです。「わたしのこれらの言葉を聞いて行う者」は、そういう土台の上に人生を築くことができるのだと言われているのです。この岩とは、主イエス・キリストです。主イエスを遣わして下さった父なる神様の愛です。主イエスが私たちのために十字架にかかって死んで下さり、父なる神様がその主イエスを復活させて下さった、その恵みのみ業です。この岩を土台として与えられているのです。

天の父の独り子である主イエスが、その死をもって人々を救われた。主イエス・キリストは神の御前で、私たちを救いを与えるために、十字架の死と復活をもって救いの御業をなさったのです。山上の説教はそのような救い主御子イエス・キリストの言葉であり、教えることを信仰の土台として過ごしていきましょう。